



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	前田幸男著『「人新世」の惑星政治学 : ヒトだけを見れば済む時代の終焉』
Author(s)	松田, 法子; Matsuda, Noriko
Citation	境界研究, 15, 109-118
Issue Date	2025-03-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.15.109
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95052
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_05.pdf



[書評論文]

前田幸男著『「人新世」の惑星政治学： ヒトだけを見れば済む時代の終焉』*

松田 法子

1. はじめに

本書は、学問や社会における人間の設定に対する疑問を出発点とし、それを著者の専門である政治学・国際政治学・平和学の議論のフィールドに投じた画期的な意欲作である。

“人間の設定”とは、どういうことか。それは、ヒト・人間と「自然」や「環境」が対置され、またそこでは、人間中心的・人間上位主義的な「人間」の位置取りが、意識的・無意識的に行われているということである。

ヒトや人間の外部や下位におかれてきた存在として照射されるのが本書のサブタイトルの背後に広がる無数の存在、ノン・ヒューマンだ。

ノン・ヒューマンとは何か。それは、ヒト以外の全ての生命と、水、太陽、大気、大地など、非生命の全てである。

なお、本書においてヒトは、食べ、眠り、排泄する生理学的なそれらとして、人間は、理性的なそれらとして呼び分けられている。

2. 著者の立場と提起

著者が本書を構想した背景は、わかりやすくこう説明される。ひとつは、持続可能な開発目標(SDGs)への疑問。またもう一つは、そのSDGsを「大衆のアヘン」だと批判した斎藤幸平が、「資本主義の継続か放棄か」の二択で議論を進めること⁽¹⁾への違和感である。「大地－地球を〈コモン〉として持続可能に管理する」ことで、「脱資本主義化した『合理的』な経済システム」を提唱する斎藤の論旨において、ノン・ヒューマンはパートナーではなく、あくまで管理・統括対象である。ゆえにそのコモン論は、ヒトの外部にノン・ヒューマンを置くものだ。このような斎藤のスタンスと同様に、“管理される自然”という暗黙の前提の上で展開してきたのが、これまでの(国際)政治学でもある。

* 前田幸男著『「人新世」の惑星政治学：ヒトだけを見れば済む時代の終焉』青土社、2023年。

(1) 斎藤幸平『人新世の「資本論」』集英社、2020年。

しかし、ノン・ヒューマン、大地、地球をそのように扱うことはできない。もし人間(の持続のために)その想像の範囲からノン・ヒューマンを管理・統括しようとするれば、遅かれ早かれ想定外のリベンジをくらうだろう。マルクスを更新しようとする斎藤の主著にはしかし、大地―地球の動的平衡が語りかけてくる内容への関心は見られない、と前田は言う。

評者の専門は建築史・都市史であるが、著者の前田氏が政治学や平和学を超えて、哲学、科学史学、科学人類学などの近年の理論や国際的な動向を縦横かつなめらかに結び合わせながら論じる諸々の指摘を痛快に読んだ。

改めて概括すると本書は、“ノン・ヒューマンと学問や社会との関係を問う”ことを通じて、“ノン・ヒューマンと、ヒト―人間との関係をつくり直すことを考える”ことへと向けられた書物である。

まず、今日支配的な政治・経済体制であるリベラル民主主義と自由市場型資本主義の基本認識には、(1) 人間／自然の二元論的理解を下敷きとする人間例外主義・人間偏重主義、(2) 私的所有権の神聖視、(3) 科学技術の進歩と自然の合理的支配への過信がある、と著者はいう。それらは無意識に伏在している(第Ⅱ部第2章)。逆にこのような前提認識なくして、今日のような市場の発達はなかったということにもなるだろう。リベラルの下敷きにあるこのような意識は本書において、人間例外主義、社会中心主義、“いのちは流れのなかにある”という認識の欠落(第Ⅱ部第3章)、社会・人間中心主義、循環世界の無理解、地球生理学の無理解(第Ⅱ部第4章)、というように繰り返し整理され、批判されている。

それではなぜいま、非ヒト＝ノン・ヒューマンを、政治学・国際関係学・平和学で対象化しなければならないのか。それこそは、「人新世」という呼び名によって象られうる、この時代の危機にある、ということになる。いま人間は、自然や大地との交戦状態にある。そして、伝統的な戦争はそれを助長してもいる。

人新世において焦点化されるべきは、統治のスケールアップや制度強化の議論ではなく、人間の認識や価値の転換である。人間は、人間である以前に、この惑星に住まう種のひとつでしかない。そして人間は、ノン・ヒューマンの存在なしには一瞬たりとも生存できない。それなのに人間が非人間と外交していないことは、超国際的な政治課題なのだ。

著者の前田氏は、少し前には、ヒトの移動、国家の三要素の揺らぎ、非西洋的秩序の編成、ポスト・コロナリズムの研究を行っていた。しかし2016～17年頃に、人新世(anthropocene)をめぐる学際的な激論が行われている様子を遭遇し、知の地殻変動を感じたという。その時は人新世を従来の知識とどのようにすり合わせてよいのか検討がつかなかったというが、その後、本書にまとめられるような論文を次々と発表してきた。

人新世をめぐる国際的な論争の渦は、もともと前田氏が関心をもっていた、“世界・地

域を覆う内在的秩序”の理論化に関係があった。そしてまた、従前その代表格だったマイケル・ハートとアントニオ・ネグリによる「帝国」の議論⁽²⁾が、その後の彼らの三部作では後退したことへの落胆もあった。加えて気がつけば、ハートとネグリの議論は“見事なまでに土の匂いが一切しない”ものだった。「大地に足をつけずして、大地との往還運動なくして、全球的秩序を考えることはいかにして可能なのか」と、前田氏は考えるに至ったという。

3. 惑星政治学とは何か

前田氏が本書で打ち出す「惑星政治学」は、批判的国際関係論の先に設定されている。現在の、あるいはこれまでの国際関係論をどのように批判するか。本書においてそれは無論、ノン・ヒューマンとの関係からである。

国際社会を構成する五つの要素は、外交・国際法・勢力均衡・大国の役割・戦争だとされてきた⁽³⁾。またこれが、主権を司るのは国家か連帯(連帯主義)かという論争にも展開を遂げる。しかしこの議論のどちらにも、ヒト以外の生物や生命は含まれていない。

もっぱら人間に焦点を当ててきたこれまでの政治学では、ヒトと自然とは切り離されていた。しかし、人新世・気候変動時代の地球において、それでは不十分だと著者は言う。ヒトがどう生きていくかという基本的問いに、政治学や国際関係学は包括的に応えられなくなってきたからだ。

まず、現在の地球は、多重絶滅のプロセスに入っている。それは、人間がどのような政治や経済の形式をとるにしても、放置すれば勝者(生き残り)がいなくなるゲームである。それがサブタイトルに込められた、“ヒトだけを見れば済む時代の終焉”ということなのだ。

確かに現在の気候変動は、かつてのそれらとは違って人間が加速させたもので、かつ、人間はそれを元に戻すことはできない。それが、人間に由来する新たな(国際地質科学連合で認められなかったにしても)地質的・気候的時代である。この時代を人新世と名付けるのは、ヒトが将来の地質に痕跡を残すほど従前の地球史とは異なる状況をつくり出しているという点と、加えてこの時代が、これまでとは異なる地球環境の変容の速度や質によって、ヒトを含む多数の生命を危機に陥らせるからである。

人間がノン・ヒューマンを人間時間に巻き込むことで、地球の時間の刻まれ方は変わった。しかし、「私たちは次の無味無臭の抽象化された大惨事のニュースを、エアコンの効いたオフィスでネクタイを締めて待つ」⁽⁴⁾状態にある。テレビやネットニュースの画面に

(2) アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート著、水嶋一憲ほか訳『〈帝国〉：グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』以文社、2003年。

(3) ヘドリー・ブル著、白杵英一訳『国際社会論：アナキカル・ソサイエティ』岩波書店、2000年。

(4) 清水耕介「日常性の国際政治学：モラルの起源としての私的経験について」国際政治学会研究大会、2017年10月27日。

延々と映し出されるのは、あくまでヒトや人間と気候危機や災害との関係であって、「大地・水・大気・動植物・人間の、分離不可能な世界の惨状」ではない。ノン・ヒューマンの無償の贈与をもとに成り立ってきた、人類にとって比較的生存しやすい一つの時代が終わりを向かえつつあるのに、そのことに気づかないか、もしくは他人事のようにそれが脳内処理されていくということの危機。そしてその責任は学問にもあるのではないか、と著者は指摘する。

既存の政治学のスタンスを批判し、「自然とヒト」を切り離さずあくまで一体のものとして捉え、かつ両者の生存と絶滅の問題に取り組む。そして、ヒトを上位に置かない新しい連帯の形をいかに構築できるか考える⁽⁵⁾。ここに「惑星政治学」が要請される、という。

それでは、惑星とは何であるか。著者はこれを、ディペシュ・チャクラバルティが挙げる四つの存在論⁽⁶⁾を引いて説明する。

世界(the World): 世界内存在としての人間に関する、徹頭徹尾、人間が主人公の物語
グローバル(the Global): 20世紀後半に加速した、経済的な一体化としてのグローバル化
地球(the Earth): グローバル化によって浮上した、危機的な存在論
惑星(the Planet): 人間と無関係な、人間への言及がない存在論

世界／グローバル／地球／惑星のどこに認識の軸足をおくかによって、見えてくる世界の現実とは異なる。人新世概念の提起は、これら四つの存在が互いに重なり合っていることを浮き彫りにする功績があった。そして惑星とは、人間存在に必要不可欠で、人間はそこに住み込んでいるが、人間存在には全く無関心なものだ。それに対峙する方法が、前田氏が掲げようとする惑星政治学なのである。

著者によれば、政治学とは他者との緊張関係を考えることから発している。そうとすれば、ヒトと惑星との関係性に向き合うことは、人新世時代の政治(学)のリアリズムにほかならない。

4. 本書の構成と論点

遅くなったが、ここで本書の構成を記す。

まえがき

序章 「人新世」の政治的リアリズム：惑星思考の鍵を握る人智圏と感受性

第I部 「人新世」の惑星政治学

(5) なお著者は、ヒトと非ヒトの絡まり合いを論じ、コロナ禍中に研究が進んだ日本のマルチスピーシーズ人類学とそのモア・ザン・ヒューマン論には批判的な立場をとる。それらは人類学の枠内に議論が留まっていたディシプリン同士の対話は始まっておらず、「カウンターパートなき対話はつぶやきに留まる」と手厳しい。

(6) Dipesh Chakrabarty, *The Climate of History in a Planetary Age* (Chicago: University of Chicago Press, 2021).

第1章	惑星政治学とは何か：人新世時代の脱人間中心主義に向けて
第2章	国際政治学はマテリアル・ターンの真意を受けとめられるか？：多重終焉の黄昏の中で
第3章	領土と主権に関する政治理論上の一考察：暴力、人民、国連をめぐるアボリアに抗して
第4章	石油から見る惑星限界の系譜学：ヒトとモノによる世界秩序
第II部	ノン・ヒューマンと共に生きる：生命の序列化を超えて
第1章	構造的暴力論から「緩慢な暴力」論へ：惑星平和学に向けた時空認識の刷新に向けて
第2章	ノン・ヒューマンとのデモクラシー序説：ヒトの声だけを拾えば済む時代の終焉へ
第3章	脱人間中心のガイア政治：リスクとしての人間とポストSDGsへ
第4章	人新世のアナーキカル・ソサエティ：ノン・ヒューマンとの戦争論として読み解く「持続可能な開発目標」
第5章	ノン・ヒューマン(と)の平和とは何か：近代法体系の内破と新たな法体系の生成へ
参考文献	
あとがき：研究、教育、そして実践へ	
初出一覧	
索引	

主な論点は章題やそのサブタイトルに凝縮されているので、詳しい内容は本書を開いて頂くこととして、評者が注目した論点をできるだけ同書の流れに沿って示すと以下のようになる。

西洋文明は、自然などのノン・ヒューマンを埒外とする「歴史」と「文明」を形づくってきた。そこにおけるノン・ヒューマンには、非西洋世界のヒトも含まれる。そしてそれは、決して過去のことではない。このままの思考様式では、その再生産から抜け出すことはできないのだ。

人種、階級、ジェンダーについての諸論も、問題系をあらかじめ指定するとその話に終始してしまう。つまりそこではやはり新たな中心的焦点が生まれ、それ以外の存在は疎外される構造となる。

惑星政治学はこれらの(人間)中心状態を当たり前で脱すると共に、国際改め「惑星」政治の主体を、国家ではなくわたしたち一人一人として設定しなす。そのときの「わたし」とは、ノン・ヒューマンを親族(kins)とする主体である。

人間には資源の使用(生産・消費から再利用まで)への意識はあるが、生成・分解・次の生命の誕生にはさほどそれが向かっていない。生産・再生産はロゴスや生権力のフィールドにある。一方で、発生・再生はピュシスや大地の力のフィールドにある。生産と再生産から「自然」を見渡して次の開発可能性と利益に目を光らせるのではなく、発生と再生の循環に身を巻き取らせていく。

生権力(ミシェル・フーコー)の存在に不可欠なのは、エネルギーの力だった。しかしその源は、大地の力(geo-power) (エリザベス・グローシュ⁽⁷⁾)である。人間はそこへ寄生しているにすぎない。従来の「生権力」論から、「大地の力」論への転換が求められる。この議論ではヒトと非ヒトとの相互作用を捉えるという点で、ブルーノ・ラトゥールのアクター分析ではみえてこない現象も抽出できる可能性がある。

新しい唯物論、ポスト・ヒューマン論、内在的自然論、オブジェクト指向主義(OOO: Object Oriented Ontology)、生成の哲学など、思想の各所で起こっているマテリアル・ターンは、それが多数の研究の交差点になりうることを示している。その背景にあるのは、人口爆発と、起こりつつある多重周縁に挟まれた“人類のサバイバル”問題なのだ。惑星研究もマテリアルな側面に軸足を置くであろうことの意味は、そこに「自身の生活との接点があるからだ。

「惑星」は、方法化されている。それは、超マクロなプラネットと、超ミクロな生活空間の双方を含む「大地」の、全てのスケールを扱うことである。惑星は、全てのスケールに内在する(そして、他のスケールとは併置されない)。そして重要な点は、そのような惑星の「内部」から関係を描くことにある――。

特に評者には、マテリアルがどう国際・世界秩序を動かし形成するかということ、石油という具体的なモノ(ノン・ヒューマン)を事例に示された第I部第4章が興味深かった。石炭より軽く、液体である石油は労働者をあまり必要としない。つまり労働者組織が発達しない。また、パイプラインはリスクのある土地をバイパスして敷設できる。石油の液体性は、石炭時代に存在した国家―資本と労働運動との力関係を崩し、前者に有利なエネルギー源となった、という指摘である。

5. 本書に通底する主張

これまでの政治・経済体制はノン・ヒューマンを外部的存在とし、利用可能な資源として扱うことで成り立ってきた。人間の土地利用はますます垂直的に深くなり、資源探索の規模と地球の領地化は拡張している。

けれどもこの地球がヒトにとって生息可能であることは、それ自体とんでもなく奇跡的なことなのだ。それにはまず、太陽や月という周辺の星の存在や位置関係がある上で、惑星地球⁽⁸⁾の表面やそれに近い層が(地球深部のマンツルの動きが発生させる磁場や、地質・

(7) K. Yusoff and N. Clark, “An Interview with Elizabeth Grosz: Geopower, Inhumanism and the Biopolitical,” *Theory, Culture & Society* 34, no. 2-3 (2017), pp. 129-146.

(8) 前田氏は「惑星地球」という表現はとっていないが、評者により便宜的にこのように記す。その意味は、地球科学的存在かつ人間活動には無関心なものとしておきたい。

水・大気といったそれぞれの時間と性質をもつ存在、そして過去には大気に酸素を加えたようにその組成を大きく変化させもした生命ら全ての)超長期的な共進化や創発的なイベント、そして動的平衡の結果として、いまこのようにあるものだ。

きわめて長い地球史のごく末端に参画したヒトは、人間という理性的な生命体となり、ここ数世紀の、特に第二次世界大戦後の数十年という短期間での急激な発達によって、惑星地球における生物圏の動的平衡を大きく切り崩そうとしている。

そのような現況の背後には、ノン・ヒューマンを親族とはみなしてこなかった文明がある。

自覚的ないし無自覚なモダニストたちには、主権国家・市場・社会のトリアーデが思考の出発点となってきた。だが、科学技術や自由民主主義、近代国家システムはあくまで“一つの宇宙(universe)”に過ぎず、実際には多宇宙・多元世界(pluniverse)が広がっている。

これからの人間は、ヒトである自分を、ノン・ヒューマンに連なる生命のひとつとして、その連なりの内側から考える必要がある。惑星的主体になることは、人間を超えた責任の問題なのだ。

評者は全体として、このような主張を本書の芯に読み取った。

こうしたスタンスのある部分は、日本でいえば「生命誌絵巻」の中村桂子⁽⁹⁾や、南方熊楠の思想を曼荼羅として提示した鶴見和子⁽¹⁰⁾、また彼女たちのような系譜の特に深い存在として、(本書でも言及される)石牟礼道子などの先達を呼び起こす。わたしたちは既にこうした論者を擁していたが、惑星的な主体意識は、(リベラル民主主義と自由市場型資本主義を構成する)“人間”たちにはいまだに広まっていない。

国際政治や経済の舞台でこのような人間批判を浸透させるには、いくつもの難関があるだろう。だが、著者が本書で丹念に言及しているように、西洋・非西洋の論者たちが既に重要な議論を提示して久しくもある。また、国外の論者たちによる概念を導入するだけでなく、日本列島という固有の大地(ジオ・ダイバーシティ)から発される言葉と概念を慎重に探すことも同時に問われるのだろう。

6. 批評と展望

では、その独自性を著者はどのように設定しているのだろうか。

表に見えやすい部分を集めてみると、言葉の二重性を意識化することと、(一般的な)仏教用語の採用が読み取れる。それらは次のようである。

(9) 例えば、中村桂子『絵巻とマンダラで解く生命誌』青土社、2016年。

(10) 例えば、鶴見和子『南方曼荼羅論』八坂書房、1992年。

縁起：縁りて起こる。関係の可変性を考える概念として。

開発：かいほつ。自己の内側を涵養する概念として。自己の外側を利用可能性において改変する「かいほつ」ではない。

自然：じねん。あるがままの全ての存在を指す概念として。人間と自然を二分する「しぜん」ではない。

五大：地・火・水・風・金のこと。地圏・水圏・大気圏・生物圏からなる四圏の相互作用がつくるクリティカル・ゾーン(ブリュノ・ラトゥール)における、五大の流れにも注目すること。

山川草木悉皆成仏：近現代の技術的応急処置ではなく、ノン・ヒューマンをパートナーとする循環を構想できるかということに向けて。

“じねんを意識して自身をかいほつする者”が、地球・惑星の生息(可能)者だとされているようだ。なお、これに対置されるのが世界・グローバルの生息者である(そしてそれらの生息範囲では、人類の平和や幸福は遅かれ早かれ縮退していく)。なお、五大の概念と自然科学の四圏との関係は評者には十分汲み取れなかった。

言語をもたないノン・ヒューマンとの政治は、ロゴス中心ではなく適切に「聴く」ことを含む、感受性中心のものであるべきだという。より深いレベルでノン・ヒューマンと交感するには、ノン・ヒューマンへの驚き、敬意、そしてそれをもっと知りたいという情動が必要となる、というのが著者の意見である。過去にそれを果たしたものに、レイチェル・カーソンの『センス・オブ・ワンダー』(1964年のカーソン没後、1998年に刊行)⁽¹¹⁾があった。

センス・オブ・ワンダーとは、共存する全体性への感性(驚き)と、そこに通底する動的平衡を奇跡的なものとして感受・尊重し、維持するバランスのことである。

このセンス・オブ・ワンダーは、本書の結論であり、秘密でもある。本書の最後の項は、近代システムを内側から更新し、ノン・ヒューマンとの「平和」を構築する感性として、その考察に充てられている。

最終項での著者の主張は次のようなものだ。人類の内面の変革によって危機に向き合うこと。自分自身が多孔的であること。“動き続ける結び目”(ダナ・ハラウェイ)であること。世界を構成することに関わる一つ一つの活動が、“惑星的主体”をつくること。惑星生態系の一部としての自己に生成変化すること。

では、そのために何をすればよいのか？

著者は具体的方法としての行動変容、自己理解の変化、土中環境改善運動など具体的な場所での実践に触れながら、“センス・オブ・ワンダーにもとづく生活の変革から社会制度の再創造につなげていくほか道はない”と言い切っている。

(11) レイチェル・カーソン著、森田真生訳『センス・オブ・ワンダー』筑摩書房、2024年。

最後に評者から若干の確認を行って、本稿を結びたい。

確認1：ヒト／非ヒト（ノン・ヒューマン）の区分はしかし、結局対象を二分することにはならないのか？

ノン・ヒューマン“からの”と言ったとたんに、対象／中心としてのヒト・人間がせり上がり続けることにもなる。ヒューマンセントリックの骨格を脱臼（脱構築）させるには、どこかで、ヒューマン／ノン・ヒューマンという記述法を解消する必要があるだろう。

だが、ノン・ヒューマンの連なりにおいてヒトや人間を語っていくことが基本事項となるにはしばし時間がかかるであろうから、その前のやむを得ないセッティング（導入）なのだろうと評者は解釈した。

なお、ヒト／非ヒトの連なりを当たり前の前提におく偉大な先例としては、石牟礼道子『樺の海の記』⁽¹²⁾がある。

確認2：問題の元は、近代（特に産業革命以降）の急進性にあるのではないか？

地球史上、惑星地球の環境が大きく変わったことは何度かあったが、ほぼ人類のみが引き金を引いたことが明らかな変化は前代未聞のことだ。この状況は長く続くことが予想され、現在という時期は恐らくまだその入口にすぎない。「人新世」という概念がここまで一挙に普及したのも、このような感覚が多くの人々にあるからだろう。人口、生産、テクノロジー、エネルギー消費、移動といったあらゆる人間活動の急進的増大がおこってきた期間、地球はヒトにとって比較的過ごしやすい気候を保っていた。惑星と人間活動の相互作用のもとにある人間社会と気候の急進性という現象を、歴史学や政治学、平和学においてどう捉えるか。

確認3：センス・オブ・ワンダー教育の必要性和重要性

惑星研究の惑星学への展開を、（先んじて）期待するにあたり始めたほうがよいプログラムとして、その教育学（pedagogy）があるように思う。惑星を含むノン・ヒューマンを日常生活に接合する感性をあたりまえにもつ“みっちん”（石牟礼道子）のような子どもたちが、次の世代の生活者、働き手、つくり手、研究者、経営者、政治家となる（ちなみに、惑星の実践者とは誰なのか、という点において、本書で著者が見いだしている一人はペシャワール会の中村哲である）。この教育学は、政治学や経済学に留まらず、あらゆる学術分野を横断して必要となるはずだ。その構想をどう学際的・実際的に進めていけるかは、大きな鍵となるのではないか。また当面、それを大人と子ども両方同時にやる必要がある。

本書のなかでは山・池・川・海での、（それらのつながりや相互作用を念頭ににおいた）文

(12) 石牟礼道子『樺の海の記』河出書房新社、2013年（初版1967年）。

理融合型の学習が言及されている。これを地球の内部や宇宙空間にも広げるのがよいかもしれない。

ともあれ評者としては、本書が拓く可能性を堪能した。ヒューマンセントリックな「グローバル」や「地球」上の「世界」から、ノン・ヒューマンと親族関係を結ぶ「惑星」への立ち位置の変更と、そこに生きる主体への変容を促す本書の刺激に、ぜひ触れてほしい。

“大地に根ざす者”への生成変化はいかに可能なのか。前田氏の今後の研究と執筆に注目し続けたい。